

健康万歳 ⑩

ウイルス感染の脅威に備えよう(21世紀は感染症との闘い)

西アフリカで発生し猛威を振るうエボラ出血熱はエボラウイルスにより感染する。その経路、規模ともにはつきり把握できず長期化、広域化の懸念を示し、既に多数の死者を出した。

頭痛や咽頭痛、筋肉痛など重症なインフルエンザ様の症状に始まり出血に至り重篤化すれば死亡率は90%と言うから恐ろしい病気である。

園で発症し、感染が広がった。高熱や頭痛、関節・筋肉痛などの症状に引続き発疹が現れ、たまには重篤化することもある。

ヒトスジシマカなど蚊の媒介により Dengue ウイルス感染により発症する。朝夕特に蚊が出るような場所に行くのは避けたい。

冬場に入るとインフルエンザが流行してくる。今は予防ワクチンが一定の効果をおよぼしているが、新型のことは少ないが、新型の流行に対しては対応が難しくなる。老人や幼少児の生活弱者では肺炎などの合併症を起こし死に至る場合も少なくない。

うがい、マスク、手洗いなど周到に行っておけば一応の感染は防げる。冬場はノロウイルスによる食中毒がある。生の貝(牡蠣など)を食べて感

染するが、丁寧な手洗いなど予防対策で充分に防げる。

感染症は何らかの原因で微生物が体内に侵入し増殖した状態で症状が起こり、血液、尿便、痰、唾液などを介して細菌、ウイルスなど第三者に侵入し感染を広がっていく病である。

まだまだウイルスによる感染症は多いが、21世紀は「感染症との闘いの世紀」とも言われている。「うつらない、うつさない」一人ひとりの自覚が肝腎である。

林 榮一 (医師・八女市立花町)



楽しい絵手紙



八女市本町 井上 一子

今年知人に紹介して頂き、絵手紙教室に入会しました。今はパソコン、携帯にメールの生活ですが、これからは一枚のハガキを通して、四季の素晴らしさや、自然の豊かなめぐみそして自分が感動し癒される様な絵を描くことで、相手の心を和ませ、会話が出来たら幸せだなと思います。それには努力と上達しかありません。たのしい大坪先生、厳しく御指導下さい。先輩の皆さんに出会い、貴重な時を持たせて事に感謝し、楽しく学んでいきたいです。

大東寺絵手紙教室の展示会を十一月八日(土) 九日(日) にします。どうぞ遊びにおいで下さい。お待ちしております。

黄櫨の会 公開講座

聴講無料 どなたもお気軽にご来場下さい

演題 生徒たちの歌、歌 講師 執行 昭男 先生 (元明善高校校長) 日時 11月22日(土) 13:30~ 場所 八女市社会福祉会館

秋の野花がきれいな俵山(1095m)

日本百名山の筆者、深田久弥の言葉に「百の頂きに百の花あり」と書いている。

今回の俵山は阿蘇外輪山のなかでも人気が高く、登山者やハイカーの数も多い。私達いつもの中高年グループに混ざって山ガールのゆかりお嬢さんと吉田隊長の孫で、みのりちゃん(5才)が初参加となった。

登山口から1時間程歩くと、左手に雄大な阿蘇五岳が見え登山者の目を楽しませてくれる。

それにしても山デビューの「みのりちゃん」の元気なこと。先になり先頭に立つと「みんなー、はやくー」だって。

やっと後半の行程となったところで、最後の胸突き八丁の急登を登りきると「ヤッター山頂だ!」

この山頂は四季折々、ほかの山では見られない草花も多くマツムシソウの群落に、まさに「俵山の頂に百の花あり」だった。

下山は、みのりちゃんの笑い声が絶えず聞こえ、初めて孫と登った吉田爺の満足そうな笑顔が印象的だった。

八女文化連盟写真部 樋口 清人



筑後市立筑後中学校一年 木下歩夢さんの模写画 坂本繁二郎先生の『母仔馬』

11月3日に坂本繁二郎先生の画業を讃える「帰居祭」が催される。そのポスターのために先生の昭和35年、78歳の油彩の『母仔馬』を模写させた。夏休み前から製作にかかった。歩夢さんは久しぶりの画材のパスによる模写に熱中した。



歩夢さんは小5ごろまで無口で、それまでの絵はやや消極的で、もの足りない作品だった。それが、突然のように積極的な作品に変化し、指導する当方に質問する内容にも変化が見受けられるようになった。読書に興味が出始めたのである。読書を通じて自分のまわりの社会に対するモノの見方が変化したからと思う。それが絵に現われた。

坂本先生の複雑な絵の構成と色彩をしっかりと見ぬいた優れた模写である。

原画の母馬は、坂本先生のお母さん、仔馬は自分を描いたといわれている。

(杉山絵の教室 杉山 亞士)



眩き

小さな旅

忘れられない旅がある。それは行って帰って二十四時間の小さな旅。

十五年前の霜月。三人の娘から私達に結婚三十五年を祝う旅のプレゼントがあった。

長女家族、次女夫婦、三女と夫と私。九名が二台の車で目指した先は、海を見下ろす高台の国民宿舎。海に沈む夕日を見て孫がカウントダウンを始めると、つられて全員窓辺に集まった。その中心には難病の夫がいた。

自由に歩ける今を大切に、主治医から言われた日、長女に珊瑚婚を祝いたいと伝えた。娘達はあつと言う間に旅を計画し、夫の体に負担の無いようにと車で一時間以内の宿を予約してくれた。二人の婿に支えられて風呂に入れたことが余程嬉しかったのか、夫は目を潤ませ婿に「ありがとう」と何度も言った。和室に敷かれた八組の布団。孫は喜々として枕投げに興じひとしきりはしゃいだ後、静かになった部屋は、歯ぎしり寝言の三重奏に包まれた。八人が肩寄せ合って眠る姿は正に幸せを絵にしたような光景だった。眠るのが勿体ないと思えるこんな夜に私は後何度巡り会うことが出来るのだろう。

その日から一か月半後、夫は自宅で静かに旅立った。子供たちからのプレゼントだと思ったあの小さな旅は、夫が私に残した最後の粋な贈り物だったのかも知れない。(夏生)